百々裏話(83)

おもて　あきら

◉謡曲の「見ゆ」と花伝の「見ゆ」

動詞「見ゆ」は通常はミエルの意で、…ガミエルの形に自動詞風に使われるが、謡曲には、「…を見ゆ」の形に、格助詞「を」を伴なった用例がしばしば見られる。

・父母に姿を見え申さん（昭君）
・いでいで姿を見え申さん（錦木）
・とても姿を見え参らすれば（芭蕉）
・いでいで有様見え申さん（下掛り船橋）

などがそれで（船橋は「を」を伴なわぬ形）、具体的には姿や有様をミセルことであり、他動詞「見す」と同意である。

このような「を見ゆ」の形は、竹取物語や源氏物語にも見られ、けっして謡曲の誤用ではない。動詞「見る」の未然形に自発・受身の意を添える助動詞「ゆ」が接合した複合動詞が「見ゆ」で、ミエル（自発）の他にミラレル（受身）意が「見ゆ」に備わっている事に由来する用法である。太平記の「敵ニ勢ヲ見ヘジト」（七・船上合戦事）、「云甲斐無キ体ヲ人ニ見ヘツル悲シサヨ」（三五・清氏叛逆事）や、

・面を更科の月に見ゆるも恥しや（姨捨）

などは、ミラレル意の「見ゆ」が格助詞「を」を上に伴なっている例である。それぞれ「見せじ」「見せつる」「見する」と言い変えても意味に大差はあるまい。ミラレルのはミセルからであり、「見ゆ」と「見す」は裏腹の関係にあるが、「見す」はミセル側を主体とした直接的表現、「見ゆ」はミセル人がミラレル立場に退いた間接的表現と言ってよいであろう。今日的語感から言って、右の用例よりも前掲の用例に違和感が強いのは、姨捨などの用例にはミラレル意が濃厚であるのに、昭君などの用法にほとんどミラレル意が感じられないためであろう。謡曲よりは後代の成立と見られるお伽草子『梵天国』に、「互に見えつ見えられつ」とあるのは、「見ゆ」に受身の助動詞「らる」が接続した形で、「見ゆ」にミラレル意が全く認められていない事を思わせるが、それほどではないにしても、「を見ゆ」の形の昭君などの「見ゆ」は、ミラレル意が極めて薄く、「見す」とほとんど同意と解してよいであろう。

注意すべきは、ミセル意の謡曲の「見ゆ」が、多く「申す」とか「参らす」とかの謙譲語を伴ない、オミセスルの意に用いられている事実である。「見す」を「見ゆ」と間接的に表現するのは、へりくだった立場をとる謙譲的敬語法と見なすべきであろう。但し、

・はやはや姿を見え給へ（檜垣）

の場合は、相手の動作について言っている異例で、謙譲的表現ではなく、尊敬的表現である。ミラレルの意はほとんど感じられず、最も「見す」の意の強い「見ゆ」と言えよう。

謡曲に見られるような、「見す」と同意の「見ゆ」は、世阿弥の『花伝』にも存する。

◎…卑しからん下職をばさのみには似すまじきなり。これ上方の御目に見ゆべからず。もし見えば、あまりに卑しくて、面白き所あるべからず。（第二物学・序）

ここの傍線部は、「見ゆ」を「見す」の意と見て、〃オ見セシテハナラヌ〃〃オ見セシタナラバ〃と解してよい所であろう。諸注もみなそう理解している。謙譲語を伴なわず、また終止形をも使っているあたり、前に見た謡曲の用法よりは、世阿弥の「見ゆ」の用法の方が自由であるらしい。謡曲が対話的要素の濃い文章であり、『花伝』は論述文であるという相違が、その原因であろうか。もっとも、「上方の御目」に関連しての用法である点に、ミセル意の「見ゆ」を敬語的に使用する謡曲との類似を見出だすことはできよう。

◎この頃はまた、あまりの大事にて、稽古

多からず。まづ声変りぬれば、第一の花失せたり。体も腰高になれば、かかり失せて、過ぎし頃の、声も盛りに、花やかに、易かりし時分の移りに、手立はたと変りぬれば、気を失ふ。結句、見物衆もをかしげなる気色見えぬれば、恥しさと申し、彼れ是れ、ここにて退屈するなり。

（第一年来稽古・十七八より）

この十七八の条は、高校の国語教科書にもよく引かれるが、傍線部を中心に、かなり難解な文である。傍線部の諸注を見ると、

・観客の方に於ても滑稽に感じているらしい様子が見えて来ると（能勢博士「評釈」）
・観客の方でも滑稽に感じているらしい様子が見えてくると（小西博士「世阿彌集」）
・当人にも見物人が変だなと思っているらしい様子が判ると（川瀬博士「口語訳花伝」）
・（観客も）おかしそうにしている気配が見えるから（西尾博士「歌論集能楽論集」）

などと、すべて「見えぬれば」を〃ミエテクル〃の意に解している。しかしながら、ここの文脈は、悪条件による演者自身の自信喪失に言及した後に、「結句」（アマツサエ・ソノウエの意。結局とは違う）の語を間に置いて「見物衆も」と言い出しているのであるから、見物衆が傍線部の主格でありたい所である。「見物衆もをかしげなる」全体を、「も」のはたらきを無視して「気色」（様子・有様）の連体修飾語と見、「気色」を傍線部の主語とする諸注は、かなり無理な解し方であろう。

ここも、「見す」と同意の「見ゆ」と見て、〃見物衆モ滑稽ニ感ジテイルラシイ様子ヲ見セルノデ〃と解すれば、するすると易く文意が通るであろう。物学条々の「見ゆ」が敬語的雰囲気を持つのを参照し、〃オ見セニナルノデ〃と解してもよかろう。従来の諸注は、謡曲に「見す」と同意の「見ゆ」があり、『花伝』内部にも前掲の如き例があることを顧慮せずに、「見ゆ」が通常はミエル意であることに引きずられた誤釈のように思われる。当人の自信喪失に拍車をかける観客の失笑に言及した文であることが明確になる事からも、ここの見ゆはミセルの意に解したい。

その場合、物学条々の二例が、演者側がミセル場合の「見ゆ」であったのに対し、右の「見ゆ」が見物衆がミセル側であるという相違点が、若干気にならないでもない。だがそれは、ミセル意の謡曲の「見ゆ」に、昭君の如き例と檜垣の如き用例とがある事実に対応しており、難点とはなるまい。

なお、『花伝』の用例ではないが、『花鏡』の「万能綰一心事」に

…申楽も、色々の物まねは作り物なり。これを持つ物は心なり。此心をば人に見

繭の会

第五期定期公演（第十七回）

7月30日（金）6時開演

於 観世会館

ツレ 遠藤 六郎
ツレ 山本 順之
ツレ 長山礼三郎

〈能〉 敦盛 シテ 北浪 照雄
ワキ 野口 敦弘
大鼓 三田 和信
小鼓 住駒 明弘
笛 寺井三千丸

〈狂言〉 不聞座頭 善竹圭五郎
子方 遠藤 喜久

〈能〉 海士 シテ 若松 宏充
ワキ 宝生 弥一
大鼓 柿原崇志
太鼓 宇野親一
小鼓 亀井俊一
笛 一噌庸二

ゆべからず。もしもし見えば、あやつりの糸の見えんがごとし。

とある。この「見ゆ」や「見え」は、「見す」よりはミラレルの意が濃厚で、謡曲の用例では嫉捨の場合に近い。謡曲に現れる「見ゆ」の用法は、すべて世阿弥伝書にも現れていると言えるようである。

◎されば、手柄のせいれひ、立合に見ゆべし。（第三問答条々、立合の手立）

ここは「せいれひ」が語義不明のままに、通常は〃手柄(力量)ノせいれひガ立合ノ時ニ見エルダロウ〃の意に解されている。しかし、花伝第七別紙口伝の「因果の花」の条に、

…大事の申楽の日、手立を変へて、得手の能をして、せいれいを出だせば、……定めて勝つ事あり…。

とある「せいれい」が「せいれひ」と同語であるとすると(その可能性が強い)、別紙口伝が「…を出だす」の形であるから、問答条々の「見ゆべし」は「見すべし」と同意で、〃手柄ノせいれひヲ立合ノ時ニ見セヨ〃の意ではないかと考えられてくる。「せいれひ」「せいれい」は精髄などの意であろうか。不確定要素を含むため明確ではないが、「見す」と同意である可能性を持つ「見ゆ」として、ついでに指摘しておく。

（46・7・1）

≪出演予定≫

7月17日（土）堺薪能（堺市大鳥大社）
羽衣和合之舞（礼三郎）葵上（寿夫）
7月26日（月）サンケイ会館20周年記念公演（大阪サンケイホール）鷹姫
7月29日（木）上智大学サマーセッション（梅若能楽学院）清経恋之音取（静夫ツレ順之）非公開
7月30日（金）繭の会（観世会館）
敦盛（照雄）海士（宏充）
8月14日（土）東京薪能（赤坂日枝神社）
菊慈童（銕之丞）

≪オイディプース王公演日程≫

7月11日～15日（夜・11日のみ昼）大阪毎日ホール
〃 16日（夜）大阪厚生年金ホール
〃 17日（昼）〃
〃 18日（昼・夜）京都会館小ホール
〃 19日～21日（夜）〃
〃 22日～24日（夜）神戸国際会館
8月17日～23日（夜・22日のみ昼）砂防会館ホール
〃 24日～25日（夜）横浜青少年ホール

東京砂防会館ホールの入場券は銕仙会事務局でも扱っています。入場料は一、一〇〇円。但し前売は一、〇〇〇円



